

2022 年 11 月 27 日（日）「全能なるイエスの来臨」

ヨハネの黙示録 1:7-8

7 見よ、この方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。ことに、彼を突き刺した者たちは。地上の部族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。8 今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である神、主がこう言われる。「私はアルファであり、オメガである。」

【序論】

2022 年も残すところ一ヶ月余りとなりました。今日から待降節に入りましたが、クリスマスに至る日々を大切に歩んでまいりたいと思います。実は、私がこの箇所を学んでいたのは9月の初旬頃だったのですが、世界の混乱に拍車がかかっていくのを目の当たりにしながら、実際にこの説教を語るときにはどうなっているのかを思い巡らしつつ取り組んでおりました。どんな状況下にあっても福音を語り続けることができるように、常にそのための備えをして生きていたいと思っています。

クリスマスは主イエスのご降誕をお祝いする時であるとともに、主の再臨に思いを寄せる時でもある。主イエスは終末的な王として世に来られるお方ですから、初臨と再臨には密接なつながりがあるのです。クリスマスに来られたお方は、世の終わりに来るべき方であった。この「終末的な王」の到来によって、世界は「終わりの時代」に入ったのです。終わりの時代は一步步前進し、究極的な終わりの日は近づいてきています。この待降節の時期、教会はより一層心備え、待望しつつ歩む必要があるでしょう。

【本論】

本論 1. 来臨の時

見よ、この方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る。ことに、彼を突き刺した者たちは。(1:7a)

この箇所は主イエスの再臨の様子を描いています。「雲」は、旧約聖書では様々な箇所ですべて「神の臨在を象徴する媒体」として現れます(出 19:9、16-18、ダニエル 7:13、詩篇 104:3、イザヤ 19:1)。中でも特に意識されているのはダニエル 7:13 でしょう。

私は夜の幻を見ていた。見よ、人の子のような者が、天の雲に乗って来て、日の老いたる者のところに着き、その前に導かれた。(ダニエル 7:13)

ここで預言されていた、世の終わりの審判者として主イエスが来られるということが語られているのです。「雲に乗って来る」と聞きますと、孫悟空の挿絵を思い浮かべやすいかもしれませんが、私の解釈では使徒 1:9 で復活の主が弟子たちから離れて行かれたときに「天に上げられ、雲に覆われて見えなくなった」と言われていたことに対応しているものではない

かと想像しています。実際、主イエスが来られたときに、丸い地球上で「すべての人」が同時に主を見ることができるのかどうか、子どもの頃から疑問に思ってきました。しかし、その時にはおそらく時間や空間という概念も何らかの意味で全く異なる領域に入るのでしょう。

「すべての人の目が彼を仰ぎ見る」。その時には、地上にあって主イエスをキリストだと認めていた人もそうでない人も、認めないわけにはいかない。主を信じていた人々にとっては救いの完成の時、待望の方がついに来られた大いなる喜びの日となる。しかし、主を信じなかった人々にとって、この日は恐るべき審きの日となるでしょう。

「ことに、彼を突き刺した者たちは」。主イエスを十字架につけた人々を指す表現ではありますが、ここではもちろん数名のローマ兵のことだけが言われているわけではありません。主イエスに無実の罪を着せたユダヤ教最高議会、その判決が本来無効であることを知った上でイエスを十字架送りにしたポンテオ・ピラト、更にキリストを憎むあらゆる時代の人々、すなわち悪魔の側に着く人々、闇を愛する人々を指しているでしょう。キリストの来臨は歴史の初めから予告されてきましたが、各人が自分の人生の中でこの方を見出し、罪を悔い改めて信ずることが求められてきました。その時が満ちるとき、神からの語りかけに耳を閉ざし続けた人々にとっては大変な日となることでしょう。

「来られる」という動詞は現在形が用いられており、主の来臨が単に未来の出来事として言われているのではなく、今まさに来つつあることを表しています。それほど切迫性をもってヨハネが語りかけてきていることを読者は読み取る必要がある。

本論 2. 決着の時

地上の部族は皆、彼のために嘆き悲しむ。然り、アーメン。(1:7b)

「再臨の時」は「決着の時」。信仰を持っているか否かが個人の永遠を決定的に分ける時です。そして、この世界を惑わしてきた悪が暴かれ、究極的な裁きが言い渡される日でもあります。

「地上の部族」という表現は曖昧ですが、「部族」という言葉は新約聖書では基本的に「族长ヤコブの十二人の息子の一人から出たすべての人々」を意味しますので、イスラエルの家系がイメージされているように思います。これはおそらく、長い期間イエスを拒んできたイスラエルの民の大規模な悔い改めが歴史の最終段階で起こることを言い表しているでしょう。

すなわち、イスラエルの一部がかたくなになったのは、異邦人の満ちる時が来るまでのことであり、こうして全イスラエルが救われることになるのです。次のように書いてあるとおりです。

「シオンから救う者が来て、ヤコブから不敬度を遠ざける。これが、彼らの罪を取り除くときに、彼らと結ぶ私の契約である。」(ローマ 11:25-27)

「嘆き悲しむ」と訳された言葉(κόπτω／コプトー)は「切る」「打ち叩く」という意味であり、胸を打って自分の罪を悔い改める姿を連想させます。

ただ、解釈の可能性はもう一つあり、悔い改めなかった者が審判者を前にして震え戦き、自分の永遠の運命を知って嘆き悲しむということが言われていると主張する学者も少なくありません。主イエスの再臨の時、それは起こるべくして起こるからです。

悪魔による世界の惑わしは、人類史の初めから今に至るまで「隠された秘密」として巧みに水面下で行なわれてきました。私は過去に創世記の講解説教をしたことがありますが、その時には「信仰の系図」にばかり目が向いていました（それはそれで一つの大事な聖書の読み方です）。しかし、聖書の読み方として、その裏側で暗躍し続ける悪魔的な「カインから出た系図」にも目を向ける必要があることを、最近特に気づかされるようになりました。人類の悪魔との交流は、エデンの園における禁断の木の実の事件から始まります。エデンの園から追放された夫婦の間に生まれた子どもたちの関係の中で、早速殺人事件が起きてしまう。ここから人類史は「信仰の道」と「不信仰の道」へと二つに分かれるのです。アベルを殺したカインは、神に対する憎悪を胸に、不信仰の歴史を築き始めました。その子孫に、レメク、トバル・カイン、（ノアの息子の）ハム、カナン、ニムロデといった代表者が次々と現れますが、神に反逆する巨大な帝国（バビロン）は元を辿るとこの系図から出てきていることが分かります。「バベル」という言葉は「バビロン」とイコールであり、この町で建設された「バベルの塔」は自らを神としようとする人間の罪の象徴でもありました。この神に敵対する民は、オカルト的な宗教儀式（性的狂宴や幼児の人身御供^{オルギア}）を伴うカナン人の風習を保持し、殺人を根幹としながら罪の歴史を構築していきました。このストーリーは長いいため、説教では小出しにお伝えしていく予定ですが、その線上に主イエスに対する不正な裁判、集団リンチ、十字架刑の出来事があるということ、更に現在世界で起きている巨大な動乱の根本原因があるということを中心に留めていただきたいと思います。

現在は、悪の力による人類の苦しみの最終段階にあるかもしれません。しかし、決着の時も近づいています。主イエスが再び世に来られるとき、歴史の裏で秘密裏に行なわれてきたことはすべて明るみに出され、悪は根絶されるでしょう。7節の最後に「然り、アーメン」という二重の確証のことばが綴られています。その日は必ず来るということをヨハネは宣言しているのです。

本論 3. 回帰の時

今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者である神、主がこう言われる。「私はアルファであり、オメガである。」（1:8）

ここでは、現在・過去・未来の全領域におられ、万事を知り尽くし、万物に対して無限の力をもっておられる神の支配が強調されています。「やがて来られる方」と訳されている部分は原文では単純に「来られる方」であり、文法的には現在分詞形が使われていることから、既に来りつつある方というニュアンスであることが分かります。主イエスの足音が聞こえる。出産の日が近づく胎児がお腹の壁を蹴っているように、真新しい世界が開ける直前の胎動が聞こえている。現在世界で起きていることは「産みの苦しみの始まり」なのかもしれません。

ん。しかし、私たちはよくよく認識しておかなくてはならないことがあります。それは、悪の勢力も、神が実現しようとしていている新天新地を、自分たちの思惑によって「似た形で」形成しようとしているということです。その世界はあくまでも人間の支配欲と強欲に基づき、究極的な貧富の差によって、僅かな超富裕層と一定数の奴隷という極端な共産主義社会が目指されている。なぜ世界中でエネルギーが高騰してきているか、なぜアメリカを中心に食品加工工場が次々と火災に遭っているか、なぜ各国の農業や酪農が国の政策でどんどん潰されていくのか、なぜ昆虫食や培養肉の開発に機関投資家が莫大な資金を提供しているのか、なぜ世界中の農地が超富裕層たちによって買収されていっているか、なぜベーシックインカムを導入が急がれているか、なぜデジタル ID スキームが促進されているか、世界が向かっている方向を注意深く読み取らなくてはなりません。2030 年を目標として、世界は経済、社会、教育、農業などの分野のリセットへと向かっているのです。国際経済フォーラムが掲げているテーマの一つが「You' ll own nothing. And you' ll be happy」であるということが、彼らの目指す世界をリアルに物語っているでしょう。2023 年は私たちにとっても試練の年になると思われます。数年に及ぶ食糧危機の始まりとなるからです。

では、黙示録は何と言っているか。そのような悪魔的な王国はひっくり返されると約束しているのです。何によってか。まことの王であるイエス・キリストの来臨によってであります。主イエスは真の新天新地を完成させてくださる。そこにはもはや人間の欲望が入り込む余地はなく、神との永遠の交わりのうちに、愛と平和による、二度と争いのない栄光の世界が開けるでしょう。そして、その世界に入ることができるのは今信じている人だけであります。

「全能者」(παντοκράτωρ／パントクラトル)という言葉は、万物に対する神の無限の力を表しています。神のご計画は必ず成るのであり、如何なる人間の力もそれには及びません。この言葉は新約聖書の中に 12 回出てきますが、そのうちの 9 回が黙示録で使用されています。それほど、本書は神の力を信じ、強調し、依り頼んでいるということです。

「アルファ」とはギリシャ語アルファベットの最初の文字、「オメガ」は最後の文字です。物事の最初と最後を表すのにこれらの言葉が使われますが、歴史を始め、歴史を終わらせる方としての主イエスの神としての権威が表されている。この表現は本書であと二回出てきます(21:6、22:13)。私たちが信じている方は、このような主権者なのです。

【結論】

私たちが主としている方がどのようなお方であるかを常に心に留めて歩んでいたいと思います。心に確固たる基盤を持つ民は揺るがされることがありません。フランシス・シェーファーという哲学者は『それでは如何に生きるべきか』という本の中で、古代ローマ帝国の興亡の中で生き残ったキリスト者について、次のように語っています。

「どんな全体主義的権威も、どんな独裁的国家も、絶対的なものによって国家やその行動を判定する人々に耐えることはできない。クリスチャンはその絶対的なものを神の啓示の中

に持っていた。クリスチャンは、それによって個人のモラルのみならず国家をも判定するところの絶対的なもの、普遍的な基準を持っていた……。」(p. 24)

私たちが信じている方の絶対性を信じ、この方に祈りつつ歩み続けたいと思います。

【祈り】

世の終わりの審判者なるイエス・キリストの父なる神様。暗黒の時代が迫って来ています。既にインフレの波に飲み込まれ始めている国々もあれば、食糧とエネルギーの枯渇によりこの冬を乗り越えられるかどうかの瀬戸際にある人々もいます。そのような地域にあって信仰に立ち続けている聖徒たちを顧みてください。また、私たちも来るべき日に備えて生きることができますように。如何なるときにも究極的な審判者であり救い主である主を見失うことがないよう、私たちの信仰をお守りください。このアドベントの期間、心から主の来臨を待ち望みつつ過ごすことができるよう、導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
人類史の初めより、光に属する者を常に残し給うた、父なる神の愛、
世の終わりに来るべき王として、第一の来臨を遂げ給うた、主イエス・キリストの恵み、
再臨の日に備えつつ、地上の日々を賢明に歩み抜かせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。